

沖縄での夏季研究会は実りあるものだった。関係者のみなさんに感謝します。夏の間、指導要領「解説」の配布、「指標」策定、教職課程再課程申請の説明がすすみ、8月29日にはJアラート発動でいわば「空襲警報」もはじまった。かつてない勢力の社会的「台風5号」はもう来ている。

全体主義に対抗するのは〈個人主義と民主主義〉だが、この理論立てが、遅れている。参考文献の2冊は、いわば「戦後教育学」の古典だ。これらはポストモダンの教育言説によって葬り去られようとしているが、私たちはそうでなく、生活教育実践と照らしてしっかり読み込み、批判的創造的に発展させる必要がある。

全体主義的な教育では、〈本音・本心を出させたい。方向のちがうものに不利益を被らせ、管理・支配する〉方法がとられる。本音が否定されたりい



じられたりすることが教師不信の根底にある。「学力テスト」などを自己や進路を操作するのに使う教師は恨まれさえする。

これに対抗する近代の教育原則が「人間の内面形成にかかわる問題は、国家権力の干渉してはならない『私事』とする原則だ(堀尾、9頁)」。しかし教育は、子どもの内面にかかわることである。公教育(学校)において、国家権力の末端(公務員)としての教師は、人間としての教師とどう両立するのか。「戦後教育学」では、教育行政には「内的事項」に介入させない原則を前提に、德育よりは知育、知育でも客観的に測定できる学校の能力(学力)に限定する方向をとってきた(測定については勝田、63頁)が、ここを検討しなければならぬ。(研究部・加藤聡一)

参考文献

- ① 堀尾輝久「現代教育の思想と構造」岩波書店 1971年。
- ② 勝田守一「能力と発達と学習」(現代教育101選 26) 国土社 1990年(原著 1964年)。